



ゆうこみゆき Vol.89

なるほどアイヌ文化エッセイ

ソコ de ソコ



アイヌ文化のことをもっともっと話したい！
本田優子と村木美幸の二人が、
その魅力を交代で執筆する
ソコ(=お便り)形式のエッセイです。



本田優子
(札幌大学教授)

今月のテーマ キナポ ーマンボウ

マンボウは北海道各地で「きなんぼつ」って呼ばれるけど、アイヌ語ではキナポ。どっちがもとなのか…よくわかりません。日高から東ではへバルブと呼ばれることが多いみたい。

私が初めてマンボウを見たのは東京のサンシャイン水族館。「なんて巨大！なんて不思議！」すっかりファンになりました。お天気のいい夏の日、マンボウは海面に浮き上がって日向ぼっこをしているんだって(かわい〜)。その姿が太陽みたいだから英語ではオーシャン・サンフィッシュ。昔のアイ



イラスト / 莊田悠人

又の人たちはそこに銚を打ち込んだら、海に潜ってなかなか上がってこない時は、「酒もイナウ(木幣)もいっぱいあげるから」って、なだめすかすんで。で、獲ったマンボウは、肉も食べるけど特に肝臓の油が大事だったみたい。私が白老でいたいたマンボウの肝あえも、とても美味でした。ちなみに肉は「サバよりも足が早い(=腐りやすい)」と言われ、なかなか市場には出回らない「海辺のごちそう」です。
江戸時代の人たちもこんなマンボウに興味津々だったみたいで、『北海随筆』(三七三九)には、現代語訳するところ書かれています。『アイヌの人たちは特に、あぶらわ



次回のテーマは「アイヌ語地名散歩(白老編)」村木美幸(アイヌ民族文化財団常勤理事)が担当します。

たを好み、マンボウの腹を割って、あぶらわたくを取り、代わりにイナウを入れて海に返すと死ぬことはない。そんなバカなって思うけど、「その証拠に腹の中にイナウがあるマンボウを度々取り揚げる」ことがある「つて。うん…」。『蝦夷島奇観』(二七九)という有名な書物には、マンボウの絵が載っています。それがとっても怖い顔なんだけど、ある時「千葉県沖でマンボウ大量捕獲」っていうテレビニュースを見てびっくり。釣り上げられたマンボウが「蝦夷島奇観」と同じ、怖い顔をしてたのです。
アイヌの物語に出てくるマンボウも、主人公の妹をさらっていった化け物が切り刻まれた末に、海に流されて化身したものだと言われたり、ちよつと不気味な存在。今も、海に浮かんで日向ぼっこしているマンボウは実は病気で重体なのだ説とか、こっちゃりついている寄生虫を鳥に食べてもらっているのだ説とか…やっぱりなんだか怪しい。でも、だからこそ、妙に心惹かれるのよね。

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団常勤理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■莊田悠人(しょうだゆうと):平取町二風谷生まれ。漫画家兼イラストレーター。幼い頃のアイヌ文化が原風景。東京在住。